

館蔵資料紹介 No 27

看護の歴史と倫理に関する書籍の紹介

足 立 みゆき



私が岐阜大学看護学科に赴任して3年が過ぎようとしています。この3年の間に図書館に足を運んだ回数はそう多くはありません。また、図書館に行っても準備したリストに載っている文献をコピーしたらすぐに図書館を後にすることがしばしばです。子供のころは読んで、読んででもまだ知らない本がある、まだ知らないことがあることに魅力を感じ図書館にすることが結構楽しかった記憶がありますが、学校を卒業し社会人になってからは目の前の現実だけに興味が向いてしまい徐々に図書館に足を運ぶことが少なくなっていったのだと思います。今回、蔵書を紹介させていただけることを機に、久しぶりにゆっくりと本に向き合うことにしました。

看護あるいはナースというと「白衣の天使」といった印象が強いようです。実際に、テレビなどでも医師については医療の中で大きな権力を握っている姿が描かれるのに対し、ナースは従属的立場が強調されています。なぜナースにはこうしたイメージしかもたれないのでしょうか。ナースがどのように見られてきたのかレリーフや絵画、写真などをもとに紹介している本を読んでもととても興味深いことが書かれています。

古代の世界では看護は専門的な活動とは考えられていませんでした。医師は男性で病人の治療をし、出産と新生児の世話を女性の産婆が担っていた様子がレリーフとして残されています(図1)。

医師と産婆以外で人の世話をしているのは乳母でした。産婆は専門家としての扱いを受けていたようですが

乳母の地位は常に従属的で専門化する兆候はありませんでした。中世後期になって、女性が自分の家の者以外の病人に宗教的、社会的地位を高めるために身の回りの世話をする姿が描かれるようになってきます(図2)。

このような行いは宗教との関係が深く、医師とは異なる独立した立場であったようです。しかし17世紀になると、カトリックとプロテスタントが分裂し宗教と医療、看護との関連が薄くなりました。そのため世俗的な男性医師が増加し、出産ですら医師による帝王切開が行われ男性医師が進入してくるようになってきます。そして、産婆の資格を得るための教材にも産婆は医師に従わなければならないといった内容が含まれることになるのです。

1700年以降になると看護は宗教から離れ、労働となり専門化していきます。そして、「ランプを持った淑女」フローレンス・ナイチンゲールが登場してきます。ナイチンゲールはその功績により近代看護の母とよばれるようになりました。しかしナイチンゲールは白一色の白衣を身に着けていたわけではありませんでした。「白衣」をまとうようになった原因は明確ではありませんが、ナイチンゲールの伝記映画「白衣の天使」(図4)でそのイメージが強固なものとなり21世紀になったいまなお根強く残っているようです。

21世紀を迎え、超高齢化に伴う保健制度の改革、医療技術の急速な進歩、新たな治療方法の開発等看護を取り巻く環境は多岐にわたって変化しました。その変化に対応するために、ナースには広く、高度な知識と技術が求められるようになりました。そのため、大学教育の必要性が高



図1(左) ローマ出産場面のレリーフ。2世紀
(「看護婦はどう見られてきたか 歴史、芸術、文学におけるイメージ」p15より抜粋)



図2(右) ラインライトの無名の画家の作。貧しい人々に服を与え病人を世話する聖エリザベート。病人への世話の一部。14世紀。
(「看護婦はどう見られてきたか 歴史、芸術、文学におけるイメージ」p27より抜粋)



図3(左) ジョセフ・A・ベンウェルの「スクタリートのフローレンスナイチンゲール」。19世紀。
(「看護婦はどう見られてきたか 歴史、芸術、文学におけるイメージ」p40より抜粋)



図4(右) 白い服を着た フローレンス・ナイチンゲール(ケイ・フランシス)。「白衣の天使」より。
(「看護婦はどう見られてきたか 歴史、芸術、文学におけるイメージ」p271より抜粋)

まり、ここ 10 年で看護系大学は 119 校にまで増加しました。そして、看護は看護学という学問であると同時に実践の科学であることが強調されるようになりました。経験的にやってきたことを踏襲するのではなく、エビデンスに基づいた判断によるケアを行わなければならないからです。そしてケアの中心となるのは当然患者です。患者にとって最善のケアを提供することが専門職であるナースに求められているからです。

しかし、今ここで書いたことを実際に臨床で行うのは容易なことではありません。その理由について、詳細な分析をしている本を紹介します。ダニエル F・チャンプリス著、浅野祐子訳「ケアの向こう側 看護職が直面する道徳的・倫理的矛盾」です。

この本は、病院でフィールドワークを行い患者や医療者に起こっていることを目の当たりにしたことをもとに書かれています。目的は「ナースが日常業務の中で倫理的問題をどのように捉え、対処しているかを、詳細に、かつ弁護できる程度の一般化をもって記述すること」です。

第 1 章は、「ナースの世界、すなわち病院は、一般社会とは全く異なる道徳システムを持っている。病院では悪人でなく善良な人がナイフを持ち、人を切り裂いている。そこでは善人が、人に針を刺し、肛門や膣に指を入れ、尿道に管を入れ、赤ん坊の頭皮に針を刺す。また、善人が泣き叫ぶ熱傷者の死んだ皮膚をはがし、初対面の人に服を脱ぐよう命令する。」といった衝撃的な言葉で始まり、「一般人にとって身の毛のよだつ残酷物語もここでは専門家の商売なのだ。」と続いています。確かに病院は一般の生活とは異なる独特の世界があります。しかし次第にそれが普通のこととして「日常化」され、業務は「ルーチン化」されていきます。チャンプリスはこの「ルーチン化」とともにナースの感情は平坦化し、そこで生じる出来事に対する感受性も失われていくと述べています。患者さえもそのルーチン化に含まれていきます。患者は人としてではなく、一つのケースとしてしか認識されないようになるのです。その結果、ナースは患者に生じる多くの倫理的問題、道徳的問題を認知しなくなっていくのだと分析します。しかし、倫理的問題こそナースが積極的に関わっていくべき必要があるはずです。なぜなら、ナースは患者を擁護する立場にあるからです。アメリカでも、アメリカ看護師協会(American Nurses Association)による「看護師の倫理綱領(Code of Ethics for Nurses)」にそのことが明記されています。チャンプリス自身もナースが患者を擁護する立場にあるということを知っています。ではなぜ、ナースは患者の倫理的問題を認知しなくなっていくと言うのでしょうか。そもそもこの本の目的は、ナースが倫理的問題をどう捉え、対処していくのかを明らかにすることでした。しかし、やはりそこには社会学者としての鋭く深い

分析がありました。

チャンプリスは医療の中におけるナースの立場を詳細に分析しています。ナースは病院職員の中でも特殊な存在です。その理由は、(1)思いやりのある(caring)人間であり、(2)専門的職業人であり、(3)組織内では比較的従属的な立場のメンバーである、ということと同時に満たすことを期待されているというのです。(1)(2)は比較的すんなりと受け入れることができますが、(3)については疑問を感じる人がいるかもしれません。ナースは病院とは雇用関係にあるため、病院の規律に従い、特定の管理者の指示のもとで多くの業務を行わなければならない。決められたシフトで勤務し、指示された処置や薬を投与します。もちろんナース独自の判断で、ケアを行うこともあります。それは状況次第です。その根本的原因是、ナースには決定権がないことです。当然、決定権がないのですから患者にとってどちらを選ばよいかといった倫理的ジレンマは感じることはありません。ジレンマというのはどちらかを選ぶことを決定する権利があるからこそ生じるのです。ではナースが倫理的ジレンマだと感じていたことは何なのでしょう。昔と異なり責任の分散化が進んだ現在の医療環境では、倫理的問題はその問題に責任をもつそれぞれの集団間の争いに発展し、実践的な問題が政治的問題として議論を要するようになり、最終的な責任主体は人間ですらなくなり組織や社会制度全体になってきていることまで鋭く指摘しています。

この本は、1979 年～1990 年のアメリカの病院でのフィールドワークによって得られたデータをもとに分析されています。この本を読んで最初に感じたことは、時代的には多少現在の状況と変わるのかもしれないが、アメリカのナースも日本のナースと同じようなことを感じているんだということとでした。そして、看護と倫理との関係に関心が高い私にとって職業としての看護と倫理的問題との関係を組織までも含めて構造的な分析がなされているこの本は大きな示唆を与えてくれました。

私の稚拙な文章ではこれらの本の魅力を十分にお伝えできていないのが残念ですが、少しでも興味のある方は是非これらの本を手にとってじっくりと読んでみていただければと思います。

文献

* A .H .ジョーンズ 編著 中島恵子監訳

「看護婦はどうみられてきたか 歴史、芸術、文学におけるイメージ」 時空出版 1997

* ダニエル F .チャンプリス著、浅野祐子訳

「ケアの向こう側 看護職が直面する道徳的・倫理的矛盾」 日本看護協会出版会 2002

(あだち みゆき：医学部助手)